

ケルト系修道院文化は ローマ・カトリック教会に屈服したのか？ —— ウィットビー教会会議の文化史的意義について ——

森 泰 男

I. 初めに

ケルト文化に対する関心が高まっています。ケルト人は、敢えて文字を持たず、記録を残さなかったため、その真の姿は後世に伝えられていません。そのために、私たちは今日ケルト人とケルト文化について知ろうとすると、周辺民族から情報を得なければなりません。しかし、これらのケルト・ウォッチャーからは客観的な情報と正当な評価を必ずしも得ることはできません。ケルト人については、古くからいろいろの噂が語られ、さまざまな「ケルト」像が描かれてきました。その存在が早くから知られていた割には、その実像はようとしてわかりませんでした。「幻の民」と称される所以であります¹⁾。今までのケルト研究はいろいろの分野においてなされてきました。美術史的研究、神話研究、妖精研究、ケルト音楽研究など各分野において優れた業績が出されています。その中で、拙論との関連において2つのグループに触れておきたいと思います。1つは、鶴岡真弓氏に代表されるケルト研究であります。それは、主として考古学的知見に基づき美術史的関心による「大陸のケルト」研究であります。文字をもたない民族ということで、ギリシャ人からは「バルバロイ」（夷狄）よばわりされていた古き時代から、ケルト人はすでにすぐれた芸術作品をたくさん生みだしていたことを強調し、その美的・芸術的センスがその後も維持され、

今日にまで及んでいる、その美的・芸術的センスは、19世紀の近代文化を乗り越えようと苦闘している現代人が求めているものを先取りしている、という立場であります²⁾。もう1つは、主としてイギリス文学を専攻している立場から、ケルト研究に入ってしまった人々のケルト研究であります。こちらはブリテン諸島に暮らしてきた「島のケルト」に注目し、そこから遡って「大陸のケルト文化」を追究するという立場であります。イギリス文学といっても、その中心を担っているのは、アイルランド出身の人々であります。それはジョナサン・スウィフト以来の大きな流れとなっています。たとえば、ジョイス研究には、アイルランドのケルト文化の理解は不可欠であります³⁾。

私のケルト研究はケルト・キリスト教文化を中心に展開しています。「大陸のケルト」文化は、主として、ケルトがキリスト教化する以前の「異教的文化」です。もちろん、ガリア戦争後のガリアにおいても、キリスト教化は徐々に進行していきました。このガロ・ローマ文化も重要ではありますが、私にとっては、ガリアのキリスト教受容、その結果として成立したガロ・ローマ・キリスト教習合文化が問題なのであります⁴⁾。ガロ・ローマ文化ではありますが、そこに伝えられたキリスト教はどちらかといえば、西方のカトリック・キリスト教よりも東方から伝えられたヨハネ的キリスト教、隠修士 (hermit) 的修道思想であります。たとえば、リヨンにおいて活躍したエイレーナイオス (Eirenaios, Irénée de Lyon [130頃-200頃]) の背後には、東方的キリスト教が控えています。2世紀のエイレーナイオスや5世紀にオーセルで活躍したゲルマヌス (Germanus, St. Germain d'Auxerre [378/80-448]) のキリスト教理解がガロ・ローマ・キリスト教研究には重要であります。幸い、エイレーナイオスの著作は現存しておりますので、これを注意深く読み解いていかなければなりません⁵⁾。

私が現在興味をもって研究したいと思っているのは、ブリテン諸島のキリスト教化であり、その結果成立したケルト・キリスト教文化であります。私はこのケルト・キリスト教文化を積極的に評価する者であります。

さて、鶴岡真弓氏の業績を誰も否定することはできないと思いますが、私に

はどうしても納得できない点があります。ユーラシア大陸の内陸部のどこかに住んでいた頃の「原ケルト」時代、ケルト人が騎馬遊牧民族文化圏に属し、宗教学的にはアニミズムの世界に生きていたことは確かであります。アニミズムは原始宗教に特徴的な生き方・考え方であります。自然の中に神々が息づいており、神々と人間とは自然の中で親しく交わるのです。また、人間と自然の中に生きる他の動物や植物とは仲間であり、共生するというのです。ところが、キリスト教は一神教であって、ケルトの良き伝統を脅かした。ケルトの人々はキリスト教の一神教の中に、妖精の信仰や守護聖人の崇敬を入れることによって、かろうじて多神教的伝統を維持することができた、というのです⁶⁾。

そこで、ケルト人のキリスト教受容とその展開を、ウィットビー教会会議前後の議論を手掛かりにして、追跡してみたいと思います。

II. ガリア戦争からウィットビー教会会議まで

最初に、私の立場を明確にしておきます。私は「原ケルト」から「大陸のケルト」へ、「大陸のケルト」から「島のケルト」へと移りゆくケルト人の文化変容（アカルチュレーション）を積極的に評価する者です。ガリアにおいて、ケルト人はローマの軍事力に敗れてしまった結果、ガリア人のローマ化が進み、「ガロ・ローマ文化」という新しい文化が出現します。「ガロ・ローマ文化」は、古典古代の人像主義（anthropomorphism）や写実主義（realism）とは違った、反写実主義（antirealism）を生きていたケルト人が、敢えてローマ文化を積極的に採り入れて生み出した習合文化であります⁷⁾。さらに、ガリア人は東と南からキリスト教を受容します。さらに、北からだんだんとフランス中央部に進出・南下してきたゲルマン系フランク王国の支配を受け入れます。まさに旧来の文化の変容と新たな文化の習合的形成であります⁸⁾。

さて、フランスの建国物語の一つに、有名な「海の聖マリア」（Ste. Marie de la Mer）の伝説があります。それによれば、イエスが十字架で磔になって殺された時に、イエスの周りにいた女性たちが難をのがれて、地中海をさまよった

挙げ句に、マルセイユ近くの海岸に漂着した、その後彼女たちはそこからローヌ川をさかのぼり、リヨンにたどりついたというのです⁹⁾。事実、2世紀の後半にリヨンには一定程度のキリスト教徒がいて、その信仰のゆえに殉教した信仰者が出た、との記録が残っています¹⁰⁾。さらに、キリスト教はセーヌ川を下ってフランス中央部に広まっていったというのです。フランス初期の歴史において、リヨンのエイレーナイオスは小アジアのヨハネのキリスト教につながっているのです。彼はローマのキリスト教ではなく、小アジアの伝統を受け継いでいるのであります。このことはブリテン諸島のケルト系修道院文化を正確に知るために非常に大切なポイントであります¹¹⁾。

次に、ブリテン諸島のケルト文化について共に考えたいと思います。ブリテン人は2世紀にローマの支配を受けることになりました。さらに、4世紀にはアングル人・サクソン人の侵略を受け、先住のケルト人はブリテン島の周縁（ウェールズ、コーンウォールなど）に追いやられました。それに対して、ヒベルニア（アイルランド）はローマ軍の侵略を受けず、アングロ・サクソンの支配も受けませんでした。その結果、この島には、ケルトの文化が純粹に維持されたのです。しかしながら、ユーラシア大陸の内陸部において馬に乗って走り回っていたケルト人は、ブリテン島の自然環境に合わせて微調整をせざるをえませんでした（草原から海原へ！）。特にエジプトにおいて成立した修道の精神はアイルランドのケルト人たちに受け継がれました。エジプトの隠修士（hermits, ギリシャ語の *eremos* [荒野] から来ています）の精神を生かしながら、孤島の隠修士になったのです¹²⁾。

周知のように、アイルランドにキリスト教を本格的に伝えたのは、パトリック（Patrick [385/89-461]）です。しかし、キリスト教はパトリックよりも前に、おそらくスコットランドあるいはブリテン島からやってきた無名の人々によってアイルランドに伝えられたと考えられます。また、パトリックの直前に、パラディウス（Palladius [?-432頃]）という人がローマ教皇ケレスティヌス1世（Coelestinus I）によってアイルランドに派遣された（431年）、という史料もあります。その詮索は後のことにします。さて、パトリックの後ろに

いるのは、オーセルのゲルマヌスと小アジアの伝統を受け継いでいるガリアの修道院です。つまり、ローマのキリスト教とは少し違った伝統を、パトリックはアイルランドに導入したのです。パラディウスとパトリックの間にも、東方的キリスト教とローマの教会との間の微妙な関係がうかがわれます¹³⁾。

アイルランドはパトリックの後を受け継ぐにふさわしい人をつぎつぎと見出していったのであります（その後のパラディウスはどうなったのでしょうか?）。1代目のパトリックの事績を受け継いだのは、コロンバ（コルムキレ）（Columba [521-597]）です。彼はアイルランドの各地に修道院（ダロウ、ケルズなど）を創立しました。さらに、コロンバはアイリッシュ海を渡ってスコットランドに行き、南部のアイオナ島にケルト系の修道院を創設しました（563年頃）。コロンバの後を受け継ぐようにしてさらに飛躍発展したのは、コロンバーヌス（Columbanus [543頃-615]）です。コロンバーヌスはブリテン島からヨーロッパ大陸に渡って、民族移動後のヨーロッパに文化の華とキリスト教信仰を伝えたのです¹⁴⁾。彼もローマから指示されて動いたのではなく、独自の軌跡を描いてヨーロッパ大陸を遍歴したのであります。問題はアイオナ島のケルト系修道院文化のその後の歩みです。コロンバの精神を受け継ぐ修道士たちはスコットランドの低地地方からイングランド北部までの各地に修道院を創設しました。彼らの働きの結果、ブリテン島の北東部の海岸地方にケルト系の修道院が点在しました。代表的なものは、ノーサンブリアの王オスワルド（Oswald [604-642]）によって招かれてアイオナにやってきたエイダン（アイダン）（Aidan [?-651]）がリンディスファーン（Lindisfarne）に建てた修道院であり、ヒルダ（Hilda [614-680]）がウィットビー（ホイットビー）（Whitby）に建てた修道院であります¹⁵⁾。

ところが、ローマ教皇グレゴリウス1世（Gregorius I [540頃-604, 在位：590-604]）はアウグスティヌス（Augustine of Canterbury [?-604]）をカンタベリーに派遣して西方教会の伝統に立つキリスト教を布教させました（597年）。その結果、イングランドを北から南に延びてきたケルト系キリスト教と、南から北へと進出して行ったローマのキリスト教がノーサンブリアの東海岸におい

てぶつかったのです。同じキリスト教なのですが、よく見ると細部においては、両者の理解としきたりにはいろいろの違いがありました。そこで、両者の間の相違について話し合い両者の合意と教会の一致を得るために、664年に、ノーサンブリアのオズウィン王（Oswin [?-651]）はウィットビーにおいて教会会議を招集しました。これは地方的な宗教会議です。しかも、その招集者は王であって、教会の最高責任者ではありませんでした。当時は、そのようなやり方は珍しくなかったようです。ウィットビー会議における話し合いの詳細はよくわかりません。公式の議事録やプロトコル（合意書）が残っていないからです。この会議のことについての細かなことについては、後代の証言があるだけです。そのこともあって、この会議の結論はローマ側の勝利に終わったと一般に言われています¹⁶⁾。それでは、ケルト系修道院文化は敗退したのでしょうか。少なくとも、ケルト系キリスト教はローマに屈服したのでしょうか。私見によれば、ケルト系キリスト教はこの問題についてしたたかな対応をしたのです。

Ⅲ. アイルランドのケルト系修道院文化

アイルランドのキリスト教はパトリックの布教によって本格的に進められました（432年）。よく知られているように、パトリックは数奇な前半生を送っています。彼はブリタニアの出身ですが、若い時に、アイルランドからやってきた海賊に拉致されてアイルランドで奴隷として働かされました。その間に、アイルランドのケルト人の生活と文化に触れることができました。その後幸いにも奴隷生活から逃げ出すことができました。彼はまっすぐにブリタニアの故郷に戻って家族と共に昔の暮らしを続けることもできたのですが、海を渡ってガリアに行きました。一度は故郷に戻つたらしいのですが、一念発起してアイルランドにもう一度行きキリスト教を布教することにしました。その準備のために、パトリックはガリアに渡りレラン島（Lérins）の修道院において修行しつつ学問的研鑽を積みました。先に少し述べましたように、そのガリアには、東方起源のキリスト教が根付いていました。ガリアの東方的キリスト教はもちろ

ん、ローマ教会に対して敵対的ではありませんでした。しかし、独自性は維持していたのです。

修道制の歴史について詳しく述べることはできませんが、東方の修道制はエジプトの奥地に一人逃れて修行をしたアントニオス（Antonios [251頃-356]）から始まりました。西方の修道制はヌルシアのベネディクトゥス（Benedictus [480頃-547/550]）によって本格的に定められました（529年）。ベネディクトゥス派の修道士は難行苦行を行わず、共同で修道生活を営んだのであります。しかし、アイルランド初期の修道士はどちらかといえば東方的な隠修士の伝統に従って修行を、離島や孤島（スケリグ・ヴィフィール島やアラン島など）において行いました¹⁷⁾。

パトリックの後を受けて、アイルランドに修道院文化を広めたのはコロンバであります。彼は主として北の各地にケルト系の修道院を建てて、ケルト修道院文化をアイルランド中に広めました。さらに、コロンバはアイリッシュ海を越えてスコットランドに行き、ヘブリディーズ諸島の1つアイオナ島（Iona Island）に修道院を創建しました。コロンバは生涯修道院長として活躍しましたが、司教にはなりません。修道院長として人々を教導する、というのがケルト系修道院のやり方でした。ケルト文化圏においては、司教区が明確に定められることはあまりありませんでした。そのほかにも、ケルト系修道院は西方的ローマの修道院とは違った慣行を持っていました。このアイルランド・ケルト系修道院制度とローマの西方的修道院制度とがノーサンブリアの東海岸においてぶつかったのです¹⁸⁾。同じキリスト教なのですが、2つを突き合わせてみると、両者の間にはいろいろな相違があることがわかりました。しかし、両者はのちの教会のように異端論争をしませんでした。また、信仰以外の理由によって教会分裂を起こしたり、大きい教会（正統派）が小さいグループを分派として排除したりはしませんでした。両者は話し合いを行って、合意に達しようとしていました。これこそ、公会議主義（conciliarism）の精神であります。それでは、ウィットビー会議の議論に入っていきます。

Ⅳ. ウィットビー教会会議

教会会議には、全世界の教会から司教が集まって話し合い、普遍的な合意を目指す公会議 (ecumenical council) と地方的な司教会議 (synod) とがあります¹⁹⁾。今問題になっているウィットビー教会会議は、664年にノーサンブリアで開かれた地方的な会議です。ノーサンブリアはもちろんアングロ・サクソン人が建てた国であります。ブリテン島に侵入してきた頃のアングロ・サクソン人は非キリスト教徒でしたが、7世紀の初めまでには、キリスト教に改宗していました。問題はキリスト教に2つの流れがあったことです。周知のように、アングロ・サクソン人はブリテン島の南半分に定住しましたので、いまやその土地はイングランドとよばれています。彼らはそこに7つの国を建てました。北から時計回りに挙げると、ノーサンブリア、イースト・アングリア、エセックス、ケント、サセックス、ウェセックス、それに中央部に位置するマーシアの7つです。後にローマの拠点になるカンタベリーは南東のケント王国にあります。ケルト系のキリスト教は北部に入っていました。ノーサンブリアには、ケルト系の修道院文化が伝えられました。その結果、ノーサンブリアでは、アングロ・サクソン人の政治的支配とアイルランド・ケルト系のキリスト教修道院文化が独自の仕方です。「国のかたち」を作っていました。そこに、ローマ的キリスト教が入り込んできたのです。ノーサンブリアの王家の内部にも、ケルト的キリスト教を奉じる者とローマのキリスト教を信じる人とが混在しました。教会の指導者も、ケルト系とローマ系とに分かれていました。そこでオズウィン王はウィットビーに教会会議を招集して、事態の収拾を図ろうとしました。ケルト系 (リンディスファーンの司教コールマン [Colman (?-676)]) とその弟子ケアダ [Ceada (?-672)] とローマ系 (ヨークの司教ウィルフリッド [Wilfrid (634-709)]) の両者は、それぞれの信仰としきたりについて説明し、相手の理解を求めました。残念ながら、地方的な教会会議に関しては、信頼できる公式議事録は、多くの場合、残っていません。それに対して、全世界の司教が集まって協議・決定する公会議に関しては、詳しい議事録が残されていま

す（マンシの『公会議史料集』²⁰）。そのような事情のために、ウィットビー教会会議については、後に書かれたリポンのステファヌスの『ウィルフリッド伝』（710年以降）や尊者ベータの『アングル人の教会史』（*Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, 731年）によって調べるしかないのです。したがって、史料としては、大いに問題ありといわねばなりません。話し合いの経過、個々人の発言、聴衆の反応などはよくわからないのです。これが正直な感想です。しかし、それではちがが明かないので、私なりにこの会議のことをまとめ、評価を出してみたいと思います。

(1) 修道士の剃髪の問題

修道士は誓願を立てるときに、その証として頭を部分的に剃ります。それは「剃髪」(tonsure)とよばれています。問題は、頭のどの部分を剃るか、ということで、ケルト系とローマ系とではやり方が違っていたのです。ローマ式は頭頂部を剃ります。それに対して、ケルト系修道院では、前頭部を剃りました²¹。私たちからみれば、つまらないことですが、外観やしきたりは当事者にとっては切実な問題だったのでしょうか。ローマ教会の代表が教会の伝統を説明した結果、ケルト系の教会はそれを理解し、ローマ教会の伝統に従うことを決心しました。しかし、依然としてケルト系教会のしきたりを固持する修道士もいたといわれています。そのために、コールマンは故郷のノーサンブリアを去ってアイオナへ移ったのであります。両教会ともこのような態度に対して寛容であったように思われます。この問題については、このあたりが無難な落とし所だといえます。

(2) 復活祭の日付け問題

それに対して、この第2の問題については、長い論争の歴史が背後にあります²²。周知のように、ナザレのイエスはユダヤ人の過ぎ越しの祭りの時に、どさくさにまぎれて磔にされて殺されました。それはユダヤ暦のニサンの月のことでした。そして、イエスは3日目に復活したと弟子たちは信じたのです。それがニサンの月の14日に起こったとされているのです。ところで、325年にニ

カイアで開かれた第1回の全世界司教会議（ニカイア公会議）において、この復活祭の日付けが問題になりました。主流派の教会はすべてこの日付けの計算方法を改めました。その主張によると、イエス・キリストは世の光であるから、その点を考慮に入れて日付けを決定すべきである、ということになるのです。春分の日には昼と夜が等しいことから天地創造の日とされましたので、その日が基準となります。そして、春分の日次の満月の後の最初の日曜日こそイエス・キリストの復活を祝うにふさわしい日だとされました。なぜ日曜日かといいますと、福音書によれば、イエス・キリストは日曜日の朝早くに復活して弟子たちの前に現れたと記されているからなのです。旧来のユダヤ暦に従って計算すると、復活祭は日曜日以外の曜日になることが多くなります。それは聖書の記述と違くと強く主張されたのです。このような複雑な計算方法に従った結果、イエスの誕生を祝う降誕祭が12月25日に固定されているのに対して、復活祭は3月の下旬から4月の下旬までの1か月の範囲内で移動するのです。世界中に広まったクリスマスと全く反対に、イースターは一般に広く受け入れられてはいません。もちろん、死んでしまったイエスが復活したということは一般の人には信じられないということもあるでしょうが、もう1つの理由は、復活祭が移動祭日だということがありそうです。ローマ教会はもちろんこの新しい計算方法をいち早く採用しました²³⁾。

さらに、教会暦の周期に関して、より古い84年周期制を守っている教会と、より新しい19年周期制を採用している教会とが併存していました²⁴⁾。実際に起こったことですが、或る共同体ではレント（受難節、大斎）を終わって、待ちに待った復活祭を祝っているというのに、隣の共同体ではまだレントの真最中ということになっていました。遠く離れた国の教会同士ならば、少しぐらいずれていても大きな問題にはならなかったかもしれません。しかし、ノーサンブリアにおいて隣同士において起こっているようなちぐはぐは好ましくありません。

歴史的に振り返ってみますと、ブリタニアのケルトがキリスト教を受容したのは、3世紀ごろですが、その後しばらくして、アングロ人とサクソン人の進

攻が始まり、ブリタニア南部はイングランドになってしまいました。アングロ人とサクソン人はまだキリスト教化していなかったため、キリスト教世界はイングランドを支配する非キリスト教徒によって南部と北部とに分断されてしまいました。その結果、北部のケルト・キリスト教社会は他のキリスト教社会から孤立し、新しい情報が入りにくくなってしまいました。この困った事態の現れの1つがイースター祝日に関する混乱でした。ローマ教会を中心とするキリスト教世界は孤立しがちなケルト・キリスト教世界をエキュメニカル（全世界的）な交わりの中に招き入れようとしていました。ケルト教会は自らの伝統的な制度に固執することなく、世界のキリスト教世界との交わりを大切に考える柔軟さを持っていました。そこで、ケルト教会の人々は、ローマ教会の説明を聞いたときにそれをよく理解し、新しいイースター日付け計算方法に切り替えることを決定しました。しかし中には、当然ながら、自分たちの古い・由緒ある計算方法を断固として守ろうとした人がいたとしてもなんら不思議ではありません²⁵⁾。

(3) 教会と修道院との関係

ケルト人はもともと氏族・部族単位で固まっていた。氏族・部族を超えて大同団結することを、ケルト人は求めませんでした。ユリウス・カエサルの指揮下で一致団結して闘ったローマ軍に対して、ガリアのケルト諸部族は個々ばらばらな対応をローマに対して行うばかりで、ケルト人が一致団結してローマと戦うということはありませんでした。それだから、ウェルキンゲトリックスの英雄行為をもってしても、ローマの強力な軍事作戦に打ち勝つことはできませんでした²⁶⁾。ケルト系のキリスト教社会では、修道院が民衆の生活の中心になり、修道院長は人々の尊敬を受けていました。その極端な例は村人の全員が修道士になっていて、修道院長は村長のような、という所もありました。ローマ側からすれば、教会の権限と司教区の確立が必要でした。この点についても、ケルト系のキリスト教は政治家（王）のリーダーシップを認めました。したがって、教会会議の決定には反対しませんでした。後の話になりますが、11世紀にヨーロッパ大陸において起こった叙任権闘争、すなわち政治権力（王

権)と教会の権利主張(教権)の対立・抗争²⁷⁾はケルト社会では起こりませんでした。イングランドはイングランドの仕方です。その問題と取り組むこととなりますが、スコットランドのアイオナ島やアイルランドでは、修道院の存在感(プレゼンス)は非常に大きなものであり続けました。その結果、アイルランドはのちに「聖者と学僧の島」と愛称されることとなります²⁸⁾。

このような次第で、ウィットビー教会会議は、「ケルト系の教会・修道院においても、ローマの伝統としきたりに従う」という合意に達しました。オズウィン王はこれをこの教会会議の正式な決定としました。したがって、ノーサンブリアをはじめとしてイングランドの教会はローマ教会の使徒的伝統に連なることを自ら選択したのです。問題は異論と異説の取り扱いです。多くの解説書が、これをローマ教会の勝利とよび、ケルト系教会は敗北した、と説明しています。たとえば、鶴岡真弓・松村一男両氏は『図説・ケルトの歴史』において、そのように説明しています²⁹⁾。たしかに、形としては、ケルト系教会は少なくともイングランドにおいて、ローマ教会のしきたりに従いました。しかし、それは単純な敗北でもなければ、屈辱的な屈服でもありません。ケルト系修道院文化の担い手たちはその合意に自主的に従ったのです。また、ローマ教会も、アイルランド・スコットランドにおけるケルト系キリスト教の独自性あるいは個性を認めたのです。ケルト系教会の指導者はその結果ノーサンブリアを去って、スコットランドのアイオナ島に戻りました。ローマ教会も去る人々の後を追いかけて滅ぼそうとはしなかったのです。彼らが全世界の交わりの中で使徒的伝承に連なることを捨てない限り、ケルト系教会の独自性を認めた、あるいはそのあり方を大目に見ようとしたのです。これを指して、ローマ教会の勝利とか、アイルランド系キリスト教の敗北などと評することは誤りだと、少なくとも私は思います。それではなぜケルト系修道院文化の敗北などと判定するのでしょうか。それはこの会議の詳しい議事録が残されていないからです。この席上決まったことについての情報はもっぱらローマ教会側に立って問題を見ている後代の著述家の記事と評価から得て、後世の研究者はそれを鵜呑みにしているからです。周知のように、もともとケルト人は文字を持ちませんでした。

あえて文字を持たなかったのです。ギリシャ人は、文字を持たず、記録を残さず、自分たちの歴史を書き残さなかった人々を「バルバロイ」(夷狄)と呼んで軽蔑しました。しかし、当のギリシャ人ももともとは口承文学に生きていたのです。トロイア戦争の物語は記憶によって口から口へと伝えられたのです。それを、紀元前8世紀になって、ホメーロスが纏めて世に出したのです³⁰⁾。しかし、一度書きとめられたが最後、記憶は失われ、生き生きとした物語は固定してしまうのです。ですから、ケルト人たちがあえて文字を持たず、記録を残さなかったからといって、非難される筋合いはありません。客観的な記録がない、と嘆いていても始まりません。また、そこに付け込んで勝手な物語を作り上げることはゆるされません。したがって、私たちにできること、私たちがすべきことは、ない資料を嘆くのではなく、ある史料を注意深く読み解くことです。

アイルランドの人々はパトリックの布教を聞き、キリスト教信仰を受け入れました。キリスト教はなによりも「文字・テキスト」の宗教です³¹⁾。『聖書』を「神の言葉」として受け入れ、その教えに従うことが大切です。すなわち、ケルト人は「文字とテキストの民」になったのです。そのことの意義は大きいといわねばなりません。やがて聖人伝や教会の歴史がブリテン諸島においてもまとめられるようになりました³²⁾。それにも拘らず、アイルランドの人々は文字が1字もないカーペット・ページを作り、ケルトの装飾写本を完成しました。もちろん、大陸のローマ系写本にも美しいものがあります。しかし、挿絵(イラストレーション)はあっても、装飾(イルミネーション)はありません。聖書写本は何よりもテキストを大切に作るからです。鶴岡真弓氏が強調されていますように³³⁾、装飾写本においては、聖書テキストとケルトの装飾文様とが共存あるいは「競存」しているのです。しかし、装飾文様はテキストを排除してはいません。宇宙が神によって創造された美しい世界であるように、装飾写本は聖書テキストを美しく飾るイルミネーションなのです。すくなくとも、装飾文様はテキストと対立し、テキストを破壊しようとはしていません。ケルト系修道院文化を正しく理解する鍵もここにあると、私は信じます。ヘーゲル的な

弁証法をここに持ち出すのは適当ではないかもしれません。安易に総合を語ってはならない、と私も思います。しかし、敵対関係でないことだけは確かです。

周知のように、スコットランドで書き始められた装飾写本は、ヴァイキングの襲撃と破壊から守るために、アイルランドの内陸部にある修道院に持ち帰られ、そこで完成されました。その結果、「ケルズの書」と「ダロウの書」とはアイルランドの至宝とされて、今も大切に保存されているのです。もう1つの装飾写本、「リンディスファーン福音書」はイングランドにおいて守られ、現在はイギリスの宝といわれています³⁴⁾。

後代の記録文書も、ギリシャの歴史とは違います。したがって、私たちはこれらの史料を読む時には、想像力を働かせつつ、テキストの行間を読む必要があります。具体的に、ウィットビー教会会議の意義について考える時には、イングランドだけを見るのではなく、スコットランドとアイルランドをも視野に入れて理解しなければなりません。アイルランドは古くからローマ教会との結びつきを大切に、今日に至っています。イングランドが16世紀にカトリック教会から離脱し、イギリス国教会（Church of England）になったのに対して、またスコットランドがカルヴァン派に変わったのに対して、アイルランドはローマ・カトリック教会に対する忠実を今も貫いています。イギリス国教会に当たるアイルランド教会がありますが、その存在感はそんなに大きくありません。さらに、プロテスタント教会はごくごく少数派です。それはウィットビー教会会議の路線を、アイルランドの人々が固く守っているからです³⁵⁾。

V. ウィットビー教会会議からハーフォード教会会議へ

664年のウィットビー教会会議において決定されたことは、イングランドにおいて広く承認されました。その結果、イングランドにおいて、ローマ教会のしきたりが普及・浸透していくように思われました。しかし、ことはノーサンブリアやイースト・アングリアに限られませんでした。また、少数者とはいえ、ウィットビー教会会議の決定に承服しない者もいただろうと思います。また、

ノーサンブリアの王も変わり、政治的事情にも変化が起きました。まず、タルソス（使徒パウロの出身地）のテオドーロス（Theodorus of Tarsus [602頃-690]）が招かれてカンタベリーの司教になりました（668年）。かれは東方のキリスト教とローマの伝統を結合し、それをイングランドに紹介しました。もちろん、そこにはケルトの伝統に立っている（あるいは、立っていた）ノーサンブリアの教会も含まれていました。テオドーロスはケルト系の良い伝統に立っている北部の教会が全世界の交わりから離れていくことを恐れました。また、ローマ的伝統に立つ中部・南部の教会が偏狭な態度でケルト系の修道院とその文化をエキュメニカルな交わりから追放することを心配しました。彼は改めてウィットビー会議の精神を再確認することが必要と判断しました。そこで、テオドーロスは673年にロンドンの近くにあるハーフォード（Hertford, ハートフォード）に全国教会会議を開き、その後の事情の変化に顧慮しつつ、ウィットビー会議の決定を再確認しました。さらに、680年にもう1回今度はハットフィールド（Hatfield）において全国教会会議を開いて念押しをしました。その結果、ウィットビーで決まったことが全イングランドの事柄として確立しました³⁶⁾。

その後の歴史を概観しますと、イングランドではカンタベリーを中心としたローマ的キリスト教が強くなっていきました。それに対して、スコットランドやアイルランドにおいては、ケルト的修道院文化が根を下ろし、その後も人々の信仰と生活の中心であり続けました。しかし、彼らは同時に、今日に至るまでローマ・カトリック教会の教えに忠実な信徒であり続けているのです。

リンディスファーン修道院はその後デーン人やヴァイキングの襲撃と破壊を何度も体験しました。この修道院を守り支えたのは、クスベルト（カスバート [Cuthbert [635-687]]) です。しかし、さすがのクスベルトも最後には支えきれなくなり、リンディスファーンを去り、アイオナへ避難しました。現在、リンディスファーンは廃墟になっています。しかし、この島は現在「聖なる島」（Holy Island）とよばれて、ノーサンブリアの人々の心のふるさとになっています。また、ウィットビーも、その後リンディスファーンと同じような歴史を

たどりました。ウィットビー修道院を創建したのは、エイダンによってこの地に派遣されたヒルダでした。彼女はここに男女の修道院を創建しました。彼女は長生きして、ウィットビー会議のその後をも見守っています。ヒルダは失望のうちに生涯を終えたのでありません。ウィットビーの聖ヒルダ修道院も、現在では廃墟になっていますが、その精神はブリテン諸島の教会と修道院文化の中に生き生きと生きています、私は考えています³⁷⁾。「ウィットビーは死せず」、復活したイエス・キリストが違ったところに同時に現れたように、「ウィットビーの精神はブリテン諸島の各地において今も生きて働いている」と信じています。

VI. 結びに代えて

鶴岡真弓氏は多神教的ケルトと一神教のキリスト教とは合わないと考えておられると思います。その矛盾を解決するために、アイルランドの人々は一神教の中に妖精の信仰を生かしたといわれます。しかし、キリスト教の神は三一（さんいつ）的であります。自己絶対的な神ではありません³⁸⁾。したがって、三一の神は他者に対しても、本来は開かれているのです。つまり、キリスト教は本来対話的存在なのです。現在、キリスト教会は宗教間対話を実践しています。それはウィットビー教会会議の精神を受け継ぐものです。ケルトとアングロ・サクソン、アングロ・ケルトとローマとは対話と共存を求めました。その精神は十字軍運動（思想）を超えて生き続けています。

次に、塩野七生氏は、一神教的キリスト教のせいでローマは寛容の精神を失い、滅びていった、と主張されています³⁹⁾。しかし、ローマがプリンキパートゥス（初期帝政）を採ったのは、キリスト教以前のことでした。ローマが皇帝礼拝をすべての人に強いたのも、キリスト教を弾圧したディオクレティアヌスでした。たしかに、コンスタンティヌスの政治は批判されねばなりません。しかし、コンスタンティヌスがキリスト教信仰をもつようになってから、ローマは初めて偏狭になったのではありません。したがって、ローマ帝国の衰亡の責任

をキリスト教の一神教に一方的に求めることには無理があります。

さらに、中沢新一氏のドルイディズムとスコトゥス・エリウゲナに対する評価はあまり説得的ではありません⁴⁰⁾。たしかに、エリウゲナ思想の一部の人には異端的と映りました。しかし、今日ではエリウゲナに対する評価は西洋のキリスト教世界ではけっして低くないのです。ケルトに対する高い評価に対応して、エリウゲナ評価も上がってきていると、私は思います。

最後に、梅原 猛氏の多神教鼯鼠は神道の宗教世界への回帰になると思います⁴¹⁾。それは、日本においては柳田国男と折口信夫の違いに関わる事柄だと思います。小さな神々（妖怪と妖精）の豊かな世界を高く評価しつつ、一神教的天皇制に結び付かないか、心配です。

ウィットビー教会会議に現れた柔軟で忍耐強い対話の精神は、一方的で形式主義的な一神教批判を超えて、エキュメニカルな宗教間・異文化間対話を促していると、私は信じています。

* 本稿は2008年12月28日に西南学院大学において開催された日本ケルト学会九州支部研究会において行った発表原稿を書き改めたものであり、主旨はまったく変わっていない。

注

- 1) 柳 宗玄・遠藤紀勝、『〈幻の民〉ヨーロッパ先住民族の神秘と謎』（社会思想社）、エリュエール、『ケルト人－蘇るヨーロッパ「幻の民」』（創元社）参照。
- 2) 鶴岡真弓、『ケルト／装飾的思考』（ちくま学芸文庫）、特に「あとがき」参照。
- 3) たとえば、柳瀬尚紀、『ジェイムズ・ジョイスの謎を解く』（岩波新書）参照。
- 4) 拙稿、「チューリヒからザンクト・ガレンへの遠回りの旅－アイルランドにおけるケルト・キリスト教の成立を巡って－」（ケルト会 in 九州 [現在：日本ケルト協会]、『Cara』第6号所収）参照。
- 5) エイレナイオス、『異端論駁』（*Adversus Haereses*）、邦訳は『キリスト教教父著作集』所収 [3, 4]（1, 2は未刊）（教文館）。
- 6) 鶴岡真弓・松村一男、『図説・ケルトの歴史－文化・美術・神話を読む』（河出書房新社・ふくろうの本）、特に「序章」参照。

- 7) 鶴岡真弓、『ケルト美術』（ちくま学芸文庫）、特に 64-72 ページ参照。
- 8) 同上、第 3 章、原 聖、『ケルトの水脈』（講談社・興亡の世界史）参照。
- 9) 田辺 保、『フランス 歴史への旅—モンマルトルからサントマリーへ』（朝日新聞社・朝日選書）、特に第 7 章参照。
- 10) 『キリスト教教父著作集』第 22 巻『殉教者行伝』所収の史料 5「ルグドゥスムにおいて最期を迎えた人々の殉教」参照。
- 11) 前出拙稿、12 ページ参照。
- 12) K. S. フランク、『修道院の歴史—砂漠の隠者からテゼ共同体まで』（教文館）参照。
- 13) 盛 節子、『アイルランドの宗教と文化』（日本基督教団出版局）参照。
- 14) 鶴岡真弓、『ケルト／装飾的思考世界』（ちくま学芸文庫）特に「序章 西のトボス」参照。
- 15) M. D. ノウルズ他、『キリスト教史』第 3 巻「中世キリスト教の成立」、特に 79-89 ページ、尊者ベダ、『イギリス教会史』（長友栄三郎訳【創文社】）、『ベダ英国民教会史』（高橋 博訳【講談社】学術文庫）第 4 巻参照。私は『アングル人の教会史』と訳している。
- 16) 鶴岡真弓・松村一男、『図説・ケルトの歴史』（河出書房新社）所収の「ケルト文化年表」の「664 年」の項には、「ウィットビー宗教会議でケルト教会がローマ教会に論争で敗北」とある。
- 17) 盛 節子、『アイルランドの宗教と文化』（日本基督教団出版部）参照。
- 18) ノウルズ他、『キリスト教史』第 3 巻、79 ページ以下参照。
- 19) フーベルト・イエディン、『公会議史—ニカイアから第二ヴァティカンまで』（南窓社）、N. P. タナー、『教会会議の歴史—ニカイア会議から第二バチカン公会議まで』（教文館）参照。
- 20) J. D. Mansi (ed.), *Sacrorum Conciliorum Nova et Amplissima Collectio* (Akademische druck- u. Verlagsanstalt).
- 21) 尊者ベダ、『英国民教会史（アングル人の教会史）』（講談社学術文庫）、特に第 4 巻参照。なお、ガリアのケルト人は長髪だったので、ガリアの中心部（ガリア・ケルティカ）は「長髪のケルト」（ケルト・コマタ）とも呼ばれていた。
- 22) J. A. ユングマン、『古代キリスト教典礼史』（平凡社）、特に 38 ページ参照。
- 23) クリスマス（降誕祭）については、O. クルマン、『クリスマスの起源』（教文館）参照。
- 24) D. E. Meek, *The Quest for Celtic Christianity* (The Handsel Press), 137f.
- 25) J. ハイウッド・B. カンリフ、『ケルト歴史地図』（東京書籍）、88 ページ参照。
- 26) カエサル、『ガリア戦記』（講談社学術文庫）、なおヴェルキンゲトリックスの立場からガリア戦争を描いた小説、佐藤賢一、『カエサルを撃て』（中央公論新社）をも参照。
- 27) A. フリシュ、『叙任権闘争』（創文社）参照。

- 28) トーマス・ケイヒル、『聖者と学僧の島』参照（ただし、原題はまったく別）。
- 29) 注(16)参照。それに対して、ミークはウィットビー教会会議をもう少し積極的に評価している（D. E. Meek, *op. cit.*, p.138）。
- 30) 岡 道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』（創文社）参照。
- 31) 『聖書』を神の言葉と認め、そのテキストを読み解くことによって、今・ここに生きる我々に対する神の語りかけ（メッセージ）として受け止める。この意味において、『聖書』は「正典」（*canon*）である。ケルトの人々はこのような「テキスト」を受容したのである。
- 32) 松岡利次、『アイルランドの文学精神－7世紀から20世紀まで』（岩波書店）、松岡利次編、『ケルトの聖書物語』（岩波書店）参照。
- 33) 鶴岡真弓、『ケルト／装飾的思考』（ちくま学芸文庫）、特に第五章「装飾写本芸術の輝き」参照。
- 34) 鶴岡真弓・松村一男、『図説・ケルトの歴史』、特に22ページ以下参照。
- 35) 盛 節子、「アイルランドのキリスト教受容－聖パトリックの伝承と象徴性」（中央大学人文科学研究所編、『ケルト 伝統と民俗の想像力』（中央大学出版部）所収）、川北 稔編、『イギリス史』（山川出版社・世界各国史）、第11章「イギリス史におけるアイルランド」（山本 正）参照。
- 36) 『ベダダ英国民教会史』（講談社学術文庫）、第3巻・第4巻、ノウルズ他、『キリスト教史』第3巻、87－97ページ参照。
- 37) 拙稿、「論駁か対論か？－アウグスティヌス・フォルトゥナトゥス公開討論について－」（『国際文化論集』第17巻第1号 所収）、宮本久雄・大貫 隆編、『一神教からの問いかけ－東大駒場連続講義』（講談社）参照。
- 38) 拙稿、「アウグスティヌス『三位一体論』における《関係》の問題」（『西南学院大学文理論集』第17巻第1号所収）参照。
- 39) 塩野七生、『ローマ人の物語』第Ⅻ巻「キリストの勝利」（新潮社）、同、『日本人へ リーダー編』（文春文庫）所収のエッセー「倫理と宗教」参照。
- 40) 中沢新一・鶴岡真弓・月川和雄編著、『ケルトの宗教 ドルイディズム』（岩波書店）所収の論文「ドルイドー息子による宗教」参照。なお、島田裕巳、『中沢新一批判、あるいは宗教的テロリズムについて』（亜紀書房）をも参照。
- 41) 梅原 猛、『梅原猛の授業 道徳』（朝日新聞社）、なお、やすいゆたか、『梅原猛 聖徳太子の夢－スーパー歌舞伎 狂言の世界』（ミネルヴァ書房）をも参照。